

# 特集 1

## 『莢音(さやね)』 をつくりこなそう

草姿コンパクトで極早生

特大さやのエダマメ品種

雪印種苗(株)

畑作園芸本部 営業課

『莢音(さやね)』は、草丈がコンパクトなことから直播で束ね出荷を可能にするだけでなく、エダマメ全品種群の中でも最大級の莢になり、加えて極早生品種であるところに最大の利用価値があります。(写真①参照)

本年は、4月から5月末にかけて干ばつとなり、ほとんど降雨がない特異

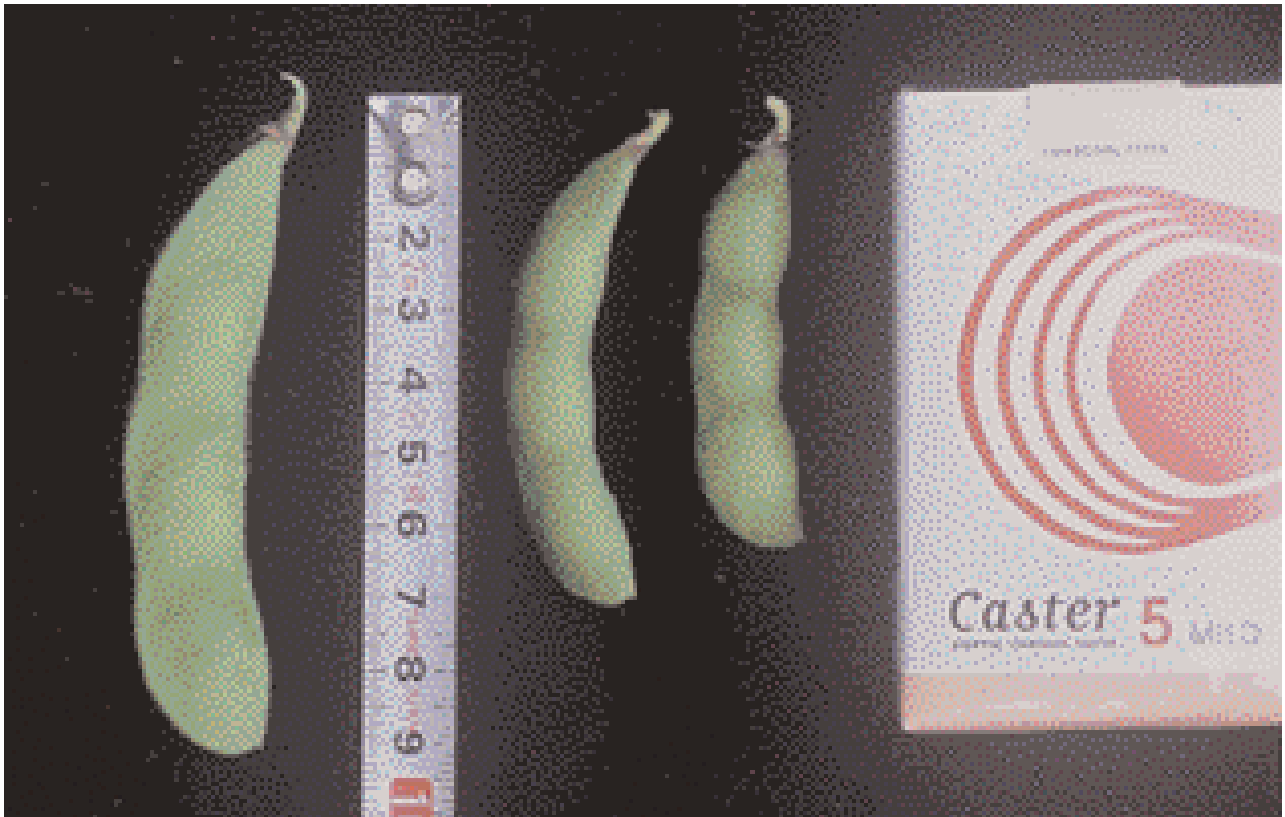
的な天候で推移しました。これらは、すべての春作物に影響を及ぼしましたが、エダマメでも明暗を分ける事例が確認されました。

発売から3年目のシーズンにあたる今年、『莢音(さやね)』を導入された各地の事例の中から、栽培のポイントを整理してみました。

■『莢音(さやね)』簡易束ね包装用  
出荷シール

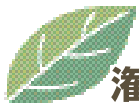


<原寸大>



■写真① 極早生品種のさやの大きさの比較 左：莢音(さやね) 中央：サッポロミドリ 右：他社極早生品種

※写真は、品種の能力を説明するもので、さやの大きさを保証する内容ではありません。  
さやの大きさは、土壌条件や気候条件、着莢状況などにより変化します。



## 灌水設備が 安定生産に貢献

写真②は山梨県の露地マルチ栽培の事例です。灌水チューブをマルチの下に敷設し、揚水ポンプで近くの用水路から水を引き、必要に応じて灌水できるようにした圃場です。当地も初期生育から開花期すぎまで雨に恵まれず、初期生育の草勢確保に苦労した年となりましたが、この圃場では灌水が順調にできたことで、草勢・生育揃い・収量とも満足いく結果となりました。

灌水の方法としては、このようにマルチ下に灌水チューブを敷設する以外に、地上部からホース等で直接散水する方法があります。この場合は、灌水ムラがないよう、まんべんなくいきわたるように注意する必要があります。写真③はこの灌水ムラが顕著に出た事例です。

写真④は神奈川県露地栽培の事例です。トンネルもマルチもしないため、今年の乾燥の影響を大きく受けました。写真は収穫間近の時期ですが、主茎長が20cmにも満たない長さで終わっています。この場合には、さや数が少なくなり低収量となりがちですが、さやが大きい『英音（さやね）』を選んだことで、若干でもこの傾向は軽減されたようです。マルチは土壤水分を安定させる働きがありますので、マルチを利用した栽培をお奨めします。特に今年のような乾燥が激しい年には、大きく現れます。



■写真② 灌水チューブをマルチ下に敷設した圃場（山梨県）



■写真③ 上半分は潤沢に灌水できた場所、下半分は水が不足気味だった場所



■写真④  
短幹傾向で収穫間近の  
『英音（さやね）』  
（神奈川県）



## 表層硬盤に 注意!!

写真⑤は静岡県の事例で水田からの転作圃場です。生産者はエダマメが過度な湿潤をきらうことから、20cmくらいのしっかりした高畝でマルチ栽培を行いました。しかし、今年の雨のサイクルや、圃場がもともと「ごろ土」傾向であったことから、エダマメが発芽する前に、表層に硬盤を形成してしまいました（写真⑥）。この株は、表層にできた硬盤をつきやぶって発芽してきたものですが、この硬盤を突き破るとき発芽したばかりのまだ柔らかい茎や子葉に傷をつけてしまいます。やがてこの傷から菌が侵入し、生育初期の段階で腐敗して枯死してしまいます（写真⑦）。こうなると実際の圃場ではマルチの穴の数の半分くらいしか発芽していないように見えてしまいます（スタンド確保の不良）。特に平坦地で極早生品種を利用する場合には低温期から播種するケースが多く、播種から発芽、初期生育の期間が長くなり被害が大きくなる傾向にあります。一方で、地温がじゅうぶん確保される作型では播種から発芽までの時間が短く、被害は比較的軽微ですむ場合が多いと言えます。



■写真⑤ 20cm程度の高畝栽培の水田転作圃場（静岡県）

表層硬盤は土壌の単粒構造で起きやすく団粒構造で起きにくいと言えます。対策としては、有機質を投入することで土壌を膨軟（団粒構造）にして表層に硬盤ができにくくする土質の改良が挙げられます。しかし表層硬盤は、水分の急激な変化（地表の乾湿の繰り返し）によって、水田からの転作圃場に問わずどんな圃場でも起こり得る可能性があります。特に今年のように播種から発芽までの期間で極端な乾燥が続く年では、不十分な土壌管理（単粒構造）で安易な灌水が引き金になるケースも想定されます。エダマメを播種した直後に灌水を厳禁としているのは、

このような障害を起こさないようにするためです。以下の3点に留意して栽培しましょう。

- ①有機質を投入した膨軟な土壌で栽培する
- ②じゅうぶんな土壤水分を確保してから播種する
- ③播種後の灌水は、本葉の完全展葉期以降に行う

■写真⑥ 表層硬盤をつきやぶって出てきた芽



■写真⑦ 新芽の茎葉に傷がつき腐敗して枯死した株





■写真⑧ エダマメの花(白花)、品種は『莢音(さやね)』



## 理想の生育パターンは？

写真⑧のようにエダマメの花は非常に小さく、質素に咲くため、よく観察していないと開花期を見逃してしまいがちです。

写真⑨は長野県での事例で、開花期における理想の生育パターンを探るために調査しました。この地域では、これまで紹介してきたフラワーキャップによる直播簡易束ね包装での出荷に取り組むため、荷姿として理想的な生育状況の目安を開花期に設定して、作況の見通しをつけようとしています。

この中では、開花期における主茎長は30cm前後が『莢音(さやね)』にとって、品質的にも収量的にもまた荷姿の見ばえもよいという結論になりました(写真中央の株、35cmの位置にマーキングしています)。左の株は20cm程度ですが、これでは莢数も少

なく節間が短いため、莢が1ヶ所にまとまりすぎて束ねにくくなります。右の株は45cm程度で、徒長ぎみで節間が長く、束ねたときの荷姿が大柄となり、まとまりが悪くなってしまいます。

がわかりました。土壤条件や気候条件によっても収穫期の草姿は変わりますが、開花期の主茎長は25cmから30cm程度が最も効率的な荷造りを可能にする生育パターンで、それを目安として栽培技術を確認しましょう。



## その他の事例

写真⑩(右ページ)は山梨県の事例ですが、防虫ネット資材を被覆したまま収穫期まで管理する方法で、全国的にはこのような応用例は散見されるようです。この場合、トンネルの大きさに限界があるため、直播で草丈が大きくなってしまいう品種では過繁茂状態となり、通気性や日照条件が悪化してしまうため、移植をしなければならない場合も想定されます。



■写真⑨ 開花期における『莢音(さやね)』主茎長と草姿(長野県)

左：20cm 中央：32cm 右45cm



■写真⑩ 防虫ネットを収穫期まで被覆する栽培(山梨県)

写真⑩の左列は『英音(さやね)』で右列は他社極早生品種です。収穫期まではまだ時間がかかる生育ステージですが、すでに右列は防虫ネットに届いて過繁茂状態になっています。

この栽培法については、もう少し実例を踏まえた検討が必要と思われますが、特に害虫の多発が予測される梅雨後半以降や、台風の襲来が多い時期などでは、以下の3点で有効な方法と推測できます。

- ①物理的な害虫防除方法として農薬使用回数が減らせる
- ②強風による倒伏被害の軽減
- ③豪雨による株の傷みの軽減

## **おわりに**

ここに紹介しましたように、『英音(さやね)』は特徴的な品種であり、その品種特性を利用して魅力的な商品づくりをしていただき、収益性が高い農業生産に活用いただけたら幸いです。

■写真⑪ 品種による草姿の違い 左：英音(さやね) 右：他社極早生品種

